

神経眼科 臨床のために 第3版

江本博文, 清澤源弘, 藤野 貞 著

今回、東京医科歯科大学眼科江本博文氏、清澤源弘氏2人のスタッフを中心に、1991年初版の藤野貞氏(故人)による『神経眼科』改訂第3版が出版された。今回書評を依頼されたので本書を紹介すると同時に、2012年に第50回を迎える日本神経眼科学会の発展も知っておいてほしいので以下に紹介する。

本邦では1974年に石川哲編・著で『神経眼科学：NEURO-OPHTHALMOLOGY(以下、N-Oと略)』が日本で初めて医学書院から発刊された。『N-O』は、故藤野氏を含む北里大学眼科教室員により執筆された。当時、神経眼科学の教科書は評者が留学したニューヨーク大学のKestenbaum(眼科臨床専門)、ジョンズ・ホプキンス大学のWalsh(神経病理学)およびカリフォルニア大学のHoyt(脳神経外科・眼科)らの著書が米国から出版されていた。そのころ日本では水俣病、神経Behçet病など日本人に数多く発症した眼症を含む特異な疾患もあったので、上記の教科書『N-O』は、それら疾患の紹介と病態の解明、診断、治療などに重点が置かれた。これら難病患者から得られる情報は複雑で、新たに開発された他覚的所見に基づく症例の神経眼科的分析法、つまり眼球運動、瞳孔、調節、輻湊などの分野に立ち入り他覚的分析法を駆使して疾患を詳述した書籍は当時世界にもみられず、日本独特の神経眼科教科書であった。

さて、約40年後非常に読みやすく整理された『神経眼科—臨床のために 第3版』が出版されたことは大変喜ばしい。本書は各章の初めに目次とページを示し、内容が順序よく記載されているので項目を探しやすい。この領域に新しく入る学徒にも文章は個条書き

で読みやすく、覚えやすく、読者の理解を容易にするための図もわかりやすくトレースされている。患者の顔写真は直接に表示しにくい現在、それを読者に理解させるには幾多の困難があるが、これを見事に克服し、図の作成、説明にもいろいろと工夫がなされている。加えて、日ごろから藤野氏が一般外来で神経眼科と関連する患者を診たとき一体何を考えるかについての解説と、今回も付録として採用された“診断七つ道具”がある。これも外来診察で大いに活用してほしい。評者がもし付け加えるとすれば、J Arden 開発のコントラスト感度測定チャートなどがあるとさらに視覚情報系異常検出に便利かもしれない。

本書では難解とされる先端の電気生理学的技術の応用、分子生物学的手法の応用による疾患分析の詳細、さらに新しい神経薬物治療法に関しては記載が少ない。例えば慢性疲労症候群や、線維筋痛症など最近の難病の治療法などは述べられていない。

数ある神経眼科教科書の最新版として本書は座右に置き、神経眼科と関連する新しい疾患の要点などを知りたいとき、神経眼科に関する基礎知識を深めたい方々にお勧めしたい。

日本神経眼科学会初代理事長／
北里大学名誉教授 石川 哲

B5 頁440 2011年

定価9,975円(本体9,500円+税5%)

[ISBN978-4-260-01375-8] 医学書院刊